優秀賞

Y君を修学旅行に参加させてくれ
―失敗が生んだ教師の決断―

神奈川県　岡部　晋一

昭和三十六年、川崎市の工業地帯にある中学校の教師になった。当時の京浜工業地帯の中心であった川崎市は、現在は緑豊かで青空の広がる都市になっているが、当時は黒い煤煙に覆われた工業都市であった。

私自身、二十四年間、工業地帯に勤務していたので、いまだに副鼻腔炎という後遺症で苦しんでいる。

二度目の三年生を担任した時、私の七組はK子という重度の喘息の生徒がいた。

修学旅行の時、K子が参加を希望していたが、学年会では、危険なので不参加に決定した。不参加を告げた私の前でK子は号泣した。

卒業式が終わった時、K子は、私に「私の想い出を奪った」と泣いた。私は、楽しい修学旅行の想い出を奪ったのだ。教師として、私の心に大きな傷が残った。

三年後、三年担任の私に、修学旅行の時がまたやって来た。今度は喘息のY君がい行けないことに学年会で決定した。

しかし、放課後、Y君の母親が職員室に来て、

「息子を修学旅行に行かせてください。死んでも文句は言いません。あの子は、幼稚園の時から、郊外活動は、一切行かせてもらえなかったので是非行かせてください。責任は問いません。」

私は心を決めた。あの三年前のK子の泣顔が浮かんで来た。そして、学年会でY君を参加させてくれと申し出た。学年主任も校長も不参加を主張した。ところが、養護教諭のU子先生が、Y君の参加を受け入れた。そして、全力でY君をサポートすると言ってくれた。

旅行前日、体育館での事前指導中、Y君は発作を起こし倒れた。しかし、旅行に参加し、無事、帰校した。

翌年、Y君は死んだ。病床には、修学旅行の写真があった。Y君は、修学旅行の想い出を持って天国へ逝った。